

## 論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1284 号	氏 名	園 田 光 佑
論文審査担当者	主 査 田 中 直 樹 副 査 上 原 剛 ・ 梅 村 武 司		
<p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>腎生検直後の新鮮検体に対する顕微鏡評価（現場評価）は、光顕標本での病理診断に適切な検体、つまり糸球体を含む皮質が十分に得られたかどうかを確認するために、有用であると報告されている。しかし、新鮮検体で確認された糸球体数と光顕標本内に認められる糸球体数の相関が乏しい症例も存在する。新鮮検体で糸球体数を実際より少なく判定した場合（過小評価時）には、腎生検穿刺回数 of 不必要な増加をもたらし、実際より多く判定した場合（過大評価時）には診断に必要な糸球体数が十分得られていない可能性があるため、どちらも臨床上大きな問題となる。これまで、新鮮検体における糸球体数の過小評価・過大評価の要因に関して、詳細な検討は行われていない。本研究は、新鮮検体で確認される糸球体数と光顕標本内の糸球体数との相関、および相関に影響を及ぼす因子を明らかにすることを目的とした。2018年11月から2020年5月の当院腎生検症例129症例を対象に、後ろ向き横断観察研究を行った。臨床的特徴、新鮮検体の現場評価所見、腎病理所見について情報を収集し、統計的に解析した。</p> <p>その結果、園田光佑は次の結論を得た。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 新鮮検体と光顕標本の糸球体数に正の相関を認めた。</li><li>2. 新鮮検体の糸球体数の過小評価に尿細管間質障害が関連していた。</li><li>3. 新鮮検体の皮質の長さや光顕標本の糸球体数に正の相関を認め、この相関は尿細管間質障害によって阻害されなかった。</li></ol> <p>これらの結果より、新鮮検体の糸球体数評価が妥当である根拠が示された。また尿細管間質障害が予測される症例では、現場評価の糸球体視認が困難となる可能性に注意し、新鮮検体の合計皮質長も糸球体数確保の参考所見となりうることが示唆された。よって主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			